

俳人
夏井いつき

俳句の「赤ペン先生」として、テレビの人気バラエティー番組や各地の俳句イベントなどで大活躍の夏井いつきさん。

中学で国語教師をしていた時代の思い出や俳句が子供たちに与える力、その魅力についてお話しいただいた。

【なついつき】

1957年生まれ。松山市在住。8年間の中学校国語教師の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞など俳人として活躍。俳句集団「いつき組」組長。創作活動や指導に加え、俳句の授業〈句会ライブ〉、全国高等学校俳句選手権「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。「プレバト!!」俳句コーナーに出演中。2015年、俳都松山大使に就任。句集『伊月集 龍』（朝日出版社）、著書『2択で学ぶ赤ペン俳句教室』（ヨシモトブックス）、『夏井いつきの365日季語手帖』（レザンクリエイト）など多数。

ノートを通じた子供たちとの コミュニケーションが楽しかった 教員時代

人気バラエティ番組「プレバト!!」で、有名人の俳句をバツバツサと斬っていく夏井いつき先生。活動拠点は現在も松山で、収録に合わせて上京されるそう。都内のホテルの一室に洋装で現れた先生。「着物も髪型も撮影用。ふだんはいつもこんな感じですよ。さて始めましょうか」。辛口どころか、優しい笑顔でインタビューが始まった。

「ご本人いわく
「陰気くさい
優等生だった郵便局の
いつきちゃん」

どんな子供時代を過ごされたのですか。

生まれは愛媛県と高知県との県境に近い愛媛県南宇和郡内海村（現在の愛南町）というところです。生家は明治のころから「家業」として郵便局をする特定郵便局でした。自宅は住まいと郵便局が一体化した造りになっていて、両親と妹、祖父母の6人家族の家で育ちました。

子供のころは…ひと言で言うと、「陰気くさい優等生」でしたね（笑）。小さな村で保育園の頃から同級生の数もメンツも変わらず。ずっと同じメンバーなので、何もしなくても、「郵便



小学生、母校にて。

局のいつきちゃん」の優等生の地位は不変なんですよ（笑）。

まるで映画の舞台のようです。小学校時代の思い出を何かお聞かせいただけますか。

母校は内海村立家申小学校。今もあります。小学校の思い出といえば、担任だった古谷先生ですね。そのころは毎日日記を提出するのが決まりで、先生は毎日必ずお返事を書いてくださいました。先生が自分だけに向かって何か書いてくれる嬉しさ、赤

ペンの色の美しさ。今でもはつきり覚えていきます。

この経験があったから、後に自分が中学校の教師になったとき、ノートにしろ日記にしろ、子供が書いたものに対しては必ず返事を書く肝に銘じていました。

小学校の先生って1時間目から全部授業がありますよね。先生はいつだって日記の返事を書いているんだらうと思うくらい、よく書いてくださいました。でも、後で考えてみたら、日記を書かない子もけっこういたのかもしれないですね（笑）。



テスト6割、ノート4割で成績をつけた

教員時代はどんな授業をされていたのですか。

私は国語の先生になってから、生徒たちにノートを提出させていたんですけど、普通に綴じてあるものではなく、ルーズリーフを使わせていました。後から家で勉強した分をはさみ込んで、ノートを自由に編集できるようにしたかったからです。

私は当時、テストだけでなくノート

も成績評価の対象にしていた、子供たちにも「成績はテスト6割、ノート4割」と告知していました。するとテストであまり点が取れない子はがんばってノートの4割を取りにきます。

自学自習したものを全部はさんでいくから1学期でかなり分厚いノートになるんですよ。文学史や作家の年表を自作して折り込んでくる子もいました。隣の先生の机にまで届くような、長い折り込みもありました。

そういうノートをみると、「よくこんなこと思いついたね、すごい！」と言つてやりたくなる。だから、学期末

になるとみんなのノートに返事を書くのが大仕事(笑)。生徒たちが楽しんで作ってくれているというのが嬉しくて、毎学期ががんばって返事を書きました。

だんだん生徒たちとのアイデア合戦になってきますね。

ポップアップカードみたいに飛び出すノートを作ってくる子もいました。ずるい子は前学期の漢字練習をはさんでいた(笑)。バレないと思つて返すから、子供たちも「あ、この手は使えないんだ」と理解する(笑)。そんなノートを通じた子供たちとのコミュニケーションが楽しかったですね。

四季折々「俳句の種」を採集させる教育

先生のご専門である「俳句」は、今、小学校教育にどのように役立つのでしょうか。

私の母校でもある愛媛の家申小学校の子供たちは、俳句がとってもうまいんです。数年前から、宮下先生という素晴らしい女性が指導してくださって

います。指導者によって子供がこんなに変わるのだということを、宮下先生が見せてくださいました。学校での教育活動の軸として「俳句」というものを一本通しているんです。

家申小学校では四季折々、子供たちに「俳句の種」を採集させています。「これは俳句の種になりますから書いておきましょうね」というクセづけを、根気よく続けていらつしやる。

子供たちは「俳句の種」を意識できるようにになると、「先生、これは俳句になるかもしれないから、書いておかないともったいないですね！」と自分から言うようになります。たったそれだけで、言葉に対するアンテナの立ち方がまったく違つてきます。

「つぶやき十季語」で俳句になる

先生が20年ほど前から全国の小中学校で開いている「句会ライブ」とは、どんなものですか。

まず私が「5分でできる簡単な俳句の作り方」を参加者に教えます。そして「よーいドン！」で全員が俳句を作り、できた作品を回収。上位の5〜10

大学生、海にて。



高校生、両親と。



句を決勝作品として選びます。

俳句って短いので、パッと見れば良し悪しはすぐに分かります。普通の規模の学校なら、トイレ休憩の10分が15分で選べます。それで選んだ上位の句を大きなスクリーンに映し出して、参加者と一緒に1位を決めていく、というスタイルです。

作文とか感想文など長文を書くには構力や語彙力、それに根気も必要です。だから、ある程度持つて生

まれた能力がある子たちじゃないとむずかしい。でも俳句は短いから、とにかく17音分つぶやければ句が作れます。

私は句会ライブで初めに俳句の作り方を説明するとき、「最近、何かイヤなことなかった？ しんどいことなかった？ それを5音と7音で喋ればいいんだよ」と言います。するとみんな「ある、ある、ある」とうなずいて、つぶやき始めます。

何が俳句の材料になるかが分かれれば、あとはつぶやくだけでいいですね。

句会ライブで全国さまざまな小学校へ行きますが、決勝に残る上位作品の半数以上は、何らかの困難を抱えている子の句なんです。身体的、能力的、精神的、環境的、いろいろな意味での困難を抱えている子たちです。

そういう子たちはみんな胸の中に言葉を持っています。でもそれをうまく喋れないし、誰に向かつて喋っているのかも分からない。ましてそれが俳句になるなんて思ってもいないわけです。

でも、とりあえずやってみると、リアリティーとオリジナリティーのあるすばらしいつぶやきになるんです。そこに季語をぶつとくつつけるだけで、「俳句」になっていくんです。

日の目を見ない子に光を当てる

知識や経験がさほどなくても、悩みや辛さも俳句の種になると。

子供には子供なりに大人への気遣いやプライドがあるから、面と向かって

俳句をやると、子供たちの言葉に対するアンテナの立ち方が全然違ってくる

親や先生、周りの大人たちに「今、○○が辛い」と悩みを打ち明けたりしません。でも、俳句なら誰に遠慮することも気兼ねすることはありません。

そのうえ「しんどいことをつぶやいて褒められた」となれば、うれしさ倍増ですよ。ふだん勉強であまり褒められない子であればなおさらです。その経験が子供たちの重荷を取り去り、しんどさを和らげる助けになります。

句会ライブは最後まで名前を出さないで選んでいきます。私にとつては、もちろん全員が初対面の子供たちです。今日3位、これは誰の句？顔を見せて」と、会場で必ず聞きます。

それで作者が立ち上がると、意外な作者に「え？ お前の句だったの!?」と、会場が騒然となります。事情が分かっている先生たちが思わず涙するような場面もよくあります。

俳句は子供たちの問題解決の一助になっっているんですね。

俳句仲間のある小学校の校長先生は、「俳句は、ふだんなかなか日の目を見ない子供たちに光を当てることができる。それが俳句のいちばん嬉しいところだ」といつもおっしゃいます。

その学校では、校長先生自ら子供たちが作った俳句をあちこちに投稿しているようです。子供たちにとって新聞に載るとか賞状がもらえるというのはすごく励みになりますからね。

全国に俳句を一生懸命やってくださっている先生がたくさんいらっしゃいます。そういう先生方は、俳句を国語の1単元としてではなく、言葉を使ったコミュニケーション教育や心を育てる教育に活用しています。

柔軟で好奇心旺盛な 小学校の先生たち

いつき先生の後ろには、全国の俳句仲間の力を感じます。

学校の先生たちは私の活動をバックアップしてくださる大きな力になっています。現場の先生たちこそ、俳句の力で子供たちが変わるということを、いちばんよく知っている方々ですから。ご自身の経験を、ナマの事例として同僚や後輩に話してください。それは、私が種を蒔くよりも、よほど確実な俳句の種蒔きになっています。

句会ライブを始めたばかりのころ、現場の先生から「俳句が良いのは理解

できますが、これ以上仕事を増やすことは私にはできません」と、よく言われました。それで、「俳句を学校現場に持ち込むことは先生方に負担を強いるだけなのか……」とジレンマに陥っていた時期があり、それを訪問先の校長先生にポロツとこぼしてしまっただことがあるんです。

するとその先生は、「教員というプロが、良いと分かっているながら自分ではできないと言うのは、新鮮な魚が入ったのを知っているのに仕入れない魚屋と一緒です。自分の時間と気力と体力は限

られているのだから、仕事を工夫して合理化して良いことを取り入れていくべき。それができないのならプロとしてご飯をいただくべきではないと僕は思う」とおっしゃいました。

その言葉は「そうだよな、それがプロというものだ。先生のおっしゃるとおりだ」と、自分自身を見つめ直すきっかけになりました。どこのどなただったのかお名前は忘れてしまいましたが（笑）、お顔とその言葉はとても印象深く記憶に残っています。



「今では、若い人や子供にも人気の俳句。ずいぶん環境が変わりました」



俳句を学校教育に使うと いろいろな「得」がある

句会ライブを通じて俳句に深入りしてくれた先生たちは、「ちょっと大変でも、やっておくと後が楽ちん」と、俳句を使うメリット、いろいろな得があるということに気づいてくださっています。

子供たちが、「これは俳句の種になりそう」と好奇心をもって物事を見るようになると、一歩踏み込んで先生の

話を聞くようになります。俳句の種を探す目で授業や行事に関わっていくと、子供たちが学びとることの「質」が変わってきます。

もし「子供が作った句が良い句かどうか分からない」「指導してみたが、ここがうまくいかなかった」というときは【日本俳句教育研究会(nhkk)】(<http://info.enhkk.net/>)へ質問を送っていただければお答えすることもできますので、ぜひ活用してください。

では、いつき先生から全国の小学校の先生と子供たちにメッセージをお願いします。

小学校の先生たちはとても柔軟で、好奇心が旺盛ですね。「句会ライブを開いてください」と声をかけてくださるのはたいへい小学校の先生たちです。

「子供たちに良いと思ったことは、とにかく何でもしてやりたい」という意識をいけばお持ちになつていらっしやる。本当に素晴らしいと思います。

そして子供たちに言いたいことはたった一つ、『プレバト!!』を見ましよう(笑)。お笑い芸人さんやジャニーズの人たちががんばっているのも、全部、子供たちにとって大人の見本です。勉強するってカッコいい、努力するって素敵! その姿が子供たちにとって身近な大人の見本になります。良い大人の見本があれば、良い子が育ちます。

「プレバト!!」に、いつき先生が登場して、俳句をめぐる環境がガラッと変わったように感じます。

俳句で世界を変えようと30年近く活動をしてきました。種を蒔いても蒔いても芽が出ない時代が長く続きま

した。でも、番組が始まってから4年半、「何かが実る時」というのは、こうやって訪れるものなんだ」と思いました。本当にありがたいことです。

最近、小学生から「先生、僕が高校生になって俳句甲子園に出るまで、元気で長生きして審査員をやってください!」って、面と向かって言われました。私のことをよっぽど年寄りのお婆さんだと思っているんでしょうね(笑)。

インタビュー後、画面にひびが入ったまま使っていたタブレットをチラッと見て先生が一句。

「タブレットの画面が割れた春の風」
「あなたが画面が割れたことを悲しんでいたら最後に悲しそうな季語。でも全然気にしていないみたいだから、春の風。ね、俳句ってカンタンでしょ!」なるほど! タレットのひび割れも俳句の種になるのである。

読者プレゼント!



夏井いつきさんの著書「2018年版 夏井いつきの365日季語手帖」を5名様にプレゼントします。応募の詳細は35ページをご覧ください。